

民間の航空で渡航中の救急医療要請では失神が最多

世界中で、年間 20 億 7500 万人が民間航空会社を利用し渡航しているが、機内での救急医療には限界がある。そこで、この研究では機内での救急医療の結果について検討した。

2008 年 1 月 1 日から 2010 年 10 月 31 日までに米国内外 5 つの航空会社の機内での救急医療の記録や設備の種類を調べた。予定外の到着地変更や病院への搬送、入院の発生率とそれに関連する要因について検討した。また、死亡率についても検討した。

その結果、11920 件の救急医療の要請があり（604 回のフライトに 1 回の救急要請の割合）、主要な症状は失神（37.4%）、呼吸器症状（12.1%）、悪心・嘔吐（9.5%）であった。機内での救急医療の 48.1%を搭乗客の中にいた医者が行い、到着地変更に至ったのは 7.3%であった。航行後の追跡データが得られた 10914 人のうち、25.8%が病院に搬送され、8.6%が入院し、0.3%が死亡した。入院の誘因として多かったのは順に、脳卒中、呼吸器症状、心臓症状であった。

したがって、機内での救急医療のほとんどが、失神、呼吸器症状、胃腸症状に関係するものであり、処置をするのは、しばしばボランティアの医者であった。到着地変更や死亡に至るのは稀で、機内で救急医療を受けた搭乗客の 4 分の 1 は、その後病院で治療を続けていた。

出典：New England Journal of Medicine 2013; 368: 2075-2083